

# Childhood occipital epilepsy ( Panayiotopoulos and Gastaut syndrome ) の経時的脳波所見と臨床経過

安元 佐和    井上 貴仁    井原由紀子  
金海 武志    友納 優子    藤田 貴子  
二之宮信也    児玉 梨恵    中村 紀子  
鶴沢 礼実    廣瀬 伸一

福岡大学医学部小児科学教室

要旨：当科で経験した小児後頭葉てんかん30例の臨床所見と経時的脳波所見について後方視的に検討した。対象は Panayiotopoulos 症候群（P群）26例，Gastaut 型（G群）4例で，平均初発年齢はP群4.2歳，G群8歳で平均発作回数はP群3回でG群は週あるいは日単位と頻回だった。最終発作年齢の平均はP群5.8歳，G群11.7歳であった。P群の44%は治療を必要とせず発作が消失したが，G群では2種以上の抗てんかん薬を使用していた。P群の突発波の局在は後頭部に限局せず，中心側頭部，前頭部へと同一症例でもシフトし，脳波異常は思春期以降も前頭部優位に残存する例があった。G群の発作波は，後頭部から半球性，全般性に波及することはあるが，焦点の移動は認めなかった。今後は両群の至適治療薬や治療期間等についての検討が必要である。

キーワード：Panayiotopoulos 症候群，Gastaut 型，早発型，視覚発作，自律神経発作